

実践報告 5

学校段階間の連携に向けたCAN-DOリストの作成及び活用例

ーCAN-DOリストの共有による中高接続の強化ー

県立加茂丘高等学校 教諭 小笠原 詠子

1 はじめに

本校は豊田市北部に位置する全校生徒 300 名程の小規模校である。平成 26, 27 年度に文部科学省「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究」に取り組み、学校全体で授業改善を進めた。研究指定終了後も校内で「学力向上プロジェクトチーム」を設置し、アクティブ・ラーニングの視点を積極的に取り入れ活用することにより、生徒の思考力、判断力、表現力等を育成するため、研究を継続している。

本実践では、特に英語学習における「中高接続」に焦点を当て、生徒の英語力育成のための指導の在り方を探ることとした。

2 生徒の実態

本校に入学する生徒には、中学校時代に英語の学習につまずき、基礎的な学力を定着させることができないまま中学校を卒業してきた生徒が多い。また、全体的に英語学習に対する苦手意識は強く、学習に対する姿勢も消極的である。

3 研究の目的

児童生徒の学力を効果的に身に付けさせるためには、指導を各学校段階内において完結するのではなく、学校間連携を推進する必要がある。しかし現在、英語教育においては指導内容や指導方法の接続が密であるとは言い難い。学校段階間の学習到達目標のつながりを明確にした CAN-DO リストの作成・活用を通して、英語指導における学校段階間の連携や接続を密にし、計画的・継続的な一貫した指導を可能とするための方法を模索したいと考えた。

4 研究の仮説

研究の目的を達成するために、次のような仮説を立てて検証することとした。

仮説：学校段階間の交流や CAN-DO リストの共有を通じて、学びの接続・連携を図ることは、児童生徒の英語によるコミュニケーション能力の育成に有効であろう。

5 研究の方法と内容

研究の仮説を検証するため、以下の方法で実践を行うこととした。

(1) 中学校との授業交流や連携事業

ア 情報交換会

イ 授業参観

(ア) 中学校教員による高等学校の授業参観

(イ) 高等学校教員による中学校の授業参観

ウ 共同での授業モデル作成

(2) CAN-DOリストの活用

ア 共通 CAN-DO リストの作成

イ 共通 CAN-DO リストの使用

6 研究の実際と考察

(1) 中学校との授業交流や連携事業

ア 情報交換会

本校は豊田市北部（旧西加茂郡藤岡町）に位置し、入学する生徒の約半数が旧藤岡町内の豊田市立藤岡中学校、豊田市立藤岡南中学校の卒業生である。そこで両中学校を訪問し、英語科の先生方と情報交換を行った。内容は、中学校での指導内容に始まり、評価の付け方など多岐にわたった。

イ 相互授業参観

本校ではここ数年、年2回公開授業週間を設け、全授業を本校保護者・地域関係者・地区の中学校教員及び高等学校教員・中学3年生の保護者に公開している。この期間中に中高連携研究授業を実施し、中学校の先生方にも授業を参観していただき、意見・感想を交換している。

また、高校教員による中学校の授業参観としては、豊田市教育委員会主催の教科領域等訪問指導における研究授業に参加させていただいた。豊田市立藤岡南中学校、豊田市立藤岡中学校共に、本校英語科教員5名が参加し、中学校の実際の授業を参観することにより、高等学校の授業において、中学校での既習事項をどのようにスパイラルアップさせることができるのか考えることができた。また、研究授業後の研究協議会にも出席し、中学校の先生方の取り組んでいる課題について意見を交換した。

ウ 共同での授業モデル作成

現在藤岡南中学校の先生方と共同で中学校における授業モデルを作成している。それまでに中学校で取り組んできたことに、本校で取り組んでいる取組の要素を加えることで、両校の取組をより近づける試みである。高校においては、新しく作った中学校における授業モデルをベースに、中学校の学習内容をスパイラルアップさせた授業計画の立案が可能となる。相互に授業を参観するだけでなく、授業計画の作成まで踏み込んだ交流をすることで、より両者の指導の一貫性が高まった。

(2) CAN-DOリストの活用

ア 共通 CAN-DO リストの作成

情報交換、授業参観等により互いの学校の様子は分かるものの、個々の生徒の到達度については正確に把握できていないのが現状である。高等学校新入学生徒に対して行っている「オリエンテーションテスト」を利用し、各生徒の学習到達度を図ることも可能ではあるが、スピーキング力も含めた4技能の到達度を測ることは難しい。

各高等学校で作成している CAN-DO リストのスタート地点と、中学校卒業時の各生徒の到達地点に「断絶」がないか、つまりその接続がシームレスであるかを調査した結果、以下のことが分かった。

- ・ 地区によっては中学校では独自の CAN-DO リストをまだ作成していない。
- ・ 中学校では教科書ベースの CAN-DO リストを使用しているところも多い。
- ・ 中学校は、各高等学校が作成している CAN-DO リストに関する情報を得る機会がない。

この調査結果を踏まえて、児童生徒の個々の学習段階に応じた指導を可能にするため、小学校から高等学校まで継続して使用可能な CAN-DO リストを作成する必要があると判断した。どの学校でも使用できるよう、教科書や教材に左右されず、新学習指導要領の5領域に対応したものを考案した(p. 6 共通CAN-DOリスト案, 資料2参照)。

例えば、スピーキング(発表)における能力は「表現力」と「構成力」に分けた。原稿を作成する場合、作成するための能力は全てライティングに含まれるため、スピーキング(発表)には含まれない。「表現力」の中では、目線や態度、視覚資料の提示方法、またはスピーチの運び方など項目を分けることにより、それぞれの段階で何をどのように指導したらよいか可視化した。また、原稿の準備についてもある程度の長さの原稿を用意する段階から、スピーチプランを立てて発表、その後に即興で発表と積み上げていく。即興で話す段階になり、即興での構成力を図るといったつくりになっている。

これまで作成された CAN-DO リストの多くは、ある時期までに設定された項目に到達できなかった生徒に対し、もう一度その項目に挑戦する機会を与えることが困難であるという問題を内包している。例えば、ライティングにおいて、1年終了時に「趣味や好き嫌いについて基礎的な表現を使って書くことができる」、2年終了時に「関心がある社会の状況についての自分の意見を、専門的でない語彙や複雑でない文法構造を用いて書くことができる」と到達目標を設定した場合、1年終了時にその項目が達成できなかった生徒に対しては、2年時以降に趣味や好き嫌いについて再び書く機会を与えなければならないが、カリキュラムや授業時間の都合から、必ずしもそれが与えられているわけではない。この共通 CAN-DO リスト案ではその点に配慮し、個々の学習到達状況に個別に対応することを可能にした。同時に、それは使用教材の内容や言語材料にも左右されず、どの学校においてもどの教科書であっても達成状況を測ることができる CAN-DO ステートメント(能力記述文)になっている。

作成に当たっては、まずは中学校の先生方との情報交換会において、前述した内容の他に、各中学校で育てたい生徒像、生徒の学習到達度に応じた中学卒業時の目標設定について詳しく聞いた。その後中学校の授業を参観し、生徒のおよその学習到達度や実際の指導の様子を把握し、それを基に共通 CAN-DO リスト案を作成した。

イ 共通 CAN-DO リストの使用

平成30年度からの本格的な実施を目指し、現段階では各校で試験的運用を行い、その妥当性を検証している。その結果を反映させ、来年度からはこの共通 CAN-DO リスト案(p. 6 資料2)に基づき、各校で3年間を見通した年間指導計画を作成する。その年間指導計画に基づき、単元構想や授業計画を作成し、授業を行う。生徒の学習到達度にそれぞれ個人により差が出ることは自然であり、到達度別 CAN-DO リストを使用することにより、それぞれの到達目標を明確にすることができる。また、年間学習計画を立てる際には、CAN-DO ステートメントの効果測定についても明示する。その際には、スモールステップを踏むことができるように、段階的な内容を設定する。

例えば、本校1年生の第1学年終了時の学習到達目標は以下の二つである。

- ・ ライティング Grade 6 「与えられたテーマについて、イントロダクション、ボディ、コンクルージョンの三つの段落構成で、30語程度のまとまった英文を書くことができる」
- ・ スピーキング(発表) Grade 6 「Show & Tell などの活動において、写真などを利用して準備されたスピーチを行うことができる」

これらを達成するための指導計画は(p. 4 資料1)のとおりである。

【資料1 コミュニケーション英語 I (使用教科書: All Aboard English Communication I)】

単元	学習内容	効果測定	測定重点項目
Lesson 0 (本校独自ブリッジ教材)	自己紹介, 他者紹介を通じたスピーチの基本	パフォーマンステスト① (個人: 友人紹介) パフォーマンステスト② (グループ: 先生紹介)	声の大きさ 発表態度 伝達度
Lesson 3 Cool Culture from Japan	よいスピーチに必要な項目	パフォーマンステスト (個人: 日本のポップカルチャー紹介①)	語数 目線 視覚資料の使用
Lesson 6 A Funny Picture from the Edo period	スピーチの構成	パフォーマンステスト (個人: 日本のポップカルチャー紹介②)	語数 (構成) 目線 伝達度

一つの単元で全ての効果測定を行うわけではなく、1年間を通じて段階を踏みながら指導する。それぞれの効果測定の重点項目を絞ることにより、段階的な指導を行うことができる。また、一つの効果測定が終了するごとに振り返りシート (p. 10 資料3) を利用し、「今回できたこと」「今回できなかったこと」「次回がんばりたいこと」などの項目について生徒本人に確認させることにより、より細かなステップを踏ませることができる。

7 成果と課題

(1) 仮説の検証

今回の取組を通して、学校段階間の接続・連携をより効果的に行うためには、「ソフト面」「ハード面」の両方からのアプローチが必要であることを再認識した。「ソフト面」に関しては、中高の教員が互いに学校を訪問し合うことで、指導の実際やソフト面での授業交流や連携事業を通じ、中学校での指導の実際や、取り組んでいる課題、目指す生徒像、高等学校に対する要望など、さまざまなことが分かった。中学校から高等学校への接続が円滑に行われるためには、私たち高等学校の教員が中学校の実際について「知ること」が不可欠である。中学校までに生徒が学んできたことの上に、高等学校での学びを積み上げていくため、接続をシームレスに行う努力は高等学校の教員がその大部分を担うべきである。そのため、本校英語科の指導について見直すよい機会となった。

また本実践では、小学校から高等学校までの一貫した CAN-DO リストを作成したが、この検証については来年度以降も継続して実施していく。実際には、CAN-DO リストを新たに作成することが必ずしも必要というわけではない。小学校の CAN-DO リストと中学校の CAN-DO リストを持ち寄り、内容をすり合わせ、また、中学校の CAN-DO リストと高等学校の CAN-DO リストをすり合わせることも有効な方法である。今回協力していただいた中学校の先生方とは、将来育てたい生徒像を共有することにより、共通の見通しをもち指導していくことができるようになるであろう。それをもつことにより、中学校と高等学校の枠を越え、地域で生徒を育成していくのだという、学校段階間の教員のつながりもより深まったように感じる。

(2) 今後の課題・展望

本実践については、平成 30 年度以降も継続して十分な検証を行いつつ、作成した共通 CAN-DO リ

スト案の有効性についての検証と調整を継続して行っていく必要がある。また、今回は豊田市藤岡地区の中学校と高等学校という限られた範囲内での連携強化を目指したのだが、将来的には連携の範囲を拡大し、近隣の小学校や、豊田市内の他の高等学校との連携も視野に入れていきたい。市内の全ての小・中学校及び高等学校が、同じ CAN-DO リストを使用し、「育てたい生徒像」を共有することができれば、小中高で一貫した目標を実現することが可能になるであろう。

また、本実践以前にも互いの授業を見学し、情報交換する機会があった。しかし、それは不定期なもので、複数の教員で行うものではなかった。本実践においては、定期的に情報交換し、互いの授業の見学をして意見を交換するなどの交流を学校同士で行い、その距離を縮めることができた。個人ではなく、それぞれがチームとして定期的に交流する意義はとても大きい。

8 おわりに

前述したように本実践は個人で行ったものではない。本校英語科が中学校の先生方と協力して取り組んできたものである。

CAN-DO リストの一番の利点は、教員全員が育成したい生徒像を共有し、その実現に向けて話し合い、学習到達目標を共有して指導を行うことができることにあると私は考える。中学校と高等学校では物理的な距離もあり、普段から密にやり取りをすることは難しい。しかし、CAN-DO リストを共有し、定期的な交流をもつことにより、より「密」な中高接続を可能にすることができると実感できた。今後もよりよい学校段階間の接続の在り方を模索していきたい。

【資料2 共通CAN-DOリスト 案】

1 スピーキング(発表)

S(P)	上	下	activity	準備	表現力			構成	Can-Do
					Non-Verbal		Delivery		
					eye-contact	その他			
0	小3 小4	小3 小4	挨拶		◎(短い)	◎(短い)	loud and clear	定型表現を使用し、目線を合わせて簡単な挨拶ができる。	
1	小5	小5	発言		◎(短い)			自分のしたいことなどを簡単に短い表現で聞き手に目線を合わせていうことができる。	
2	小5	小6			◎(短い)			限られた範囲内で、伝えようとする内容を整理した上で、簡単に基本的な語句を用いて話すことができる。	
3	小6	中1	short speech		◎(短い)			自分の伝えたいことについて基本的な語句を用いて短いスピーチをすることができる。	
4	小6	中2			◎(短い)			与えられたテーマについて初歩的な英語で簡単なスピーチをすることができる。	
5	中1	中3	self introduction	script	50%			<ul style="list-style-type: none"> 準備されたスピーチを練習して Read & Look Up で明瞭に読み上げることができる 簡単な短いスピーチであれば、キーワードのみで聞き手に目線を合わせて行うことができる。 	
6	中2	高1	informative speech		70%	Visual Aids (pictures)		Show & Tell などにおいて、写真などを使用して、準備されたスピーチを行うことができる。	
7	中3	高2			90%	smile/confident		聞き手に語りかけるよう目線を合わせ、自信をもってスピーチを行うことができる。	
8	高1	高3	speech plan	speech plan	90%	Visual Aids (chart/graph)	強調(要点をアピール)	表やグラフを使用し、要点や重要なポイントを強調し、印象に残るスピーチを行うことができる。	
9	高2	高3	persuasive speech	即興	90%		C+R+C	即興で与えられたテーマについて、その場で自分の意見をまとめ、理由を付け、主張することができる。	
10	高3	高3			90%		C+R+E+C	その場で与えられたテーマについて、その場で自分の意見、その根拠、また具体的な事例を挙げ、構成のしつかりした主張ができる。	

※ 上：ファストラーナー（習熟度の高い学習者） 下：スローラーナー（習熟度の低い学習者）

網掛け：各学年の到達目標

※ C+R+E+C: Claim(主張)+Reason(理由)+Evidence/Example(根拠/例示)+Conclusion(まとめ)

2 スピーキング (やり取り)

S(I)	上		下	activity	音声	イント ネー ション	length	つなが り	Fluency	Accuracy	社会言 語能力	Can-Do
0	小3 小4	～	小3 小4	挨拶	遅	△	1 往復	×				定型文を使用し、簡単な挨拶をすることができ る。
1	小5	～	小5	自分のことについての 質問に答える	遅	△	2, 3 往復	△				自分やごく身近なことに ついて、初歩的に答える ことができる。
2	小5	～	小6		遅	△	始めて 終わる	△				自分やごく身近なことに ついて、会話を始め、 終わることができる。
3	小6	～	中1	相手のことについて 質問する	普	△	2, 3 往復	△				相手やごく身近なことに ついて、初歩的に簡単な 英語または定型表現を 使用し、質問することが できる。
4	小6	～	中2		普	○	始めて 終わる	△				イントネーションも意識 しながら、相手や自分の ことについて、初歩的に 簡単な英語を使用し、 会話ができる。
5	中1	～	中3	相づちを入れながら QA	普		40秒程 度	△				ある程度の時間、基本 的な表現を使用し、会 話を続けることができる。
6	中2	～	高1	興味のあるテーマ で会話			40秒程 度	○				興味のある、または身 近なテーマについて、 会話を自然に続けるこ とができる。
7	中3	～	高2	与えられたテーマ で会話			40秒程 度	○				その場で与えられたテ ーマについて、会話を 自然に続けることが できる。
8	高1	～	高3	ディベートQA					○	△		相手の主張に対し、 疑問や矛盾など質問 する、またはそれに 答えることができる。
9	高2	～	高3	ディベート(反駁)					○	○		言語の正確性を意識 しつつ、論点を整理し ながらやり取りが できる。
10	高3	～	高3	ディスカッション					◎	○		その場に応じた言語 を意識しながら、意 見を交換し、結論を 導くことができる。

3 ライティング

W	上	下	語数/文数	構成	可読性	説得力	論理性	明瞭性	表現力			Can-Do
									正確	適切	オーセンティック	
1	小5	小5	Alphabet	-	文字	-	-	-	-	-	-	アルファベットの大文字・小文字を分かるように書くことができる。
2	小5	小6	語を書く 文を写す	-	語/文	-	-	-	-	-	-	音声として親しんだ短い語句や文を、語の区切りを意識して書くことができる。
3	小6	中1	1 sentence	-	句読点①	-	-	-	-	-	-	簡単な表現を用いて、短い単文を書くことができる。
4	小6	中2	2-3 short sentences	C	句読点①	×	意見	-	簡単な接続詞	-	-	簡単な表現を用いて、自分の意見を2～3文の短い文で書くことができる。
5	中1	中3	4-5 short sentences	C+R	句読点②	△	理由	△	サインポスト①	△	△	自分の意見を理由を添えて、4～5文の短い文で書くことができる。
6	中2	高1	30 words	I-B-C	段落分け	△	△	△	サインポスト②	△	△	与えられたテーマについて、イントロダクション、ボディ、コンクルージョンの三つの段落構成で、30語程度のまとまった英文を書くことができる。
7	中3	高2	50 words	I-Bx3-C	△	意見/事実	△	△	段落整理	△	△	与えられたテーマについて、イントロダクション、三つのボディ、コンクルージョンの五つの段落構成で、50語程度のまとまった英文を、意見と事実、主観と客観を区別して書くことができる。
8	高1	高3	100 words	TS/SS CREC	句読点③	○	具体性	○	根拠	○	△	与えられたテーマについて、理由と具体的な根拠を示し、100語程度のまとまった英文を書くことができる。 トピックセンテンス、サポートセンテンスを意識した段落を書くことができる。
9	高2	高3	150 words			○		○		○	△	僅かな表現上の誤りはあるものの、自らテーマを設定し、150語程度のまとまった英文を書くことができる。
10	高3	高3	200 words			◎	◎	◎		◎	○	自らテーマを設定し、表現上の誤りがほとんどなく、オーセンティシティについて意識した200語程度のまとまった英文を書くことができる。

4 リーディング / 5 リスニング

L	上	下	速度	Condition		Task	Car-Do
				長さ	難易度		
1	小5	小5	ゆっくりはつきり	挿影 簡単な指示	なしみあり	理解度	なじみのある挨拶や簡単な指示をゆっくりはつきりと話されれば、理解し応答できる。
2	小5	小6	↓	語句 定型表現	↓		ゆっくりはつきりと話されれば、初歩的な語句や定型表現を理解することができる。
3	小6	中1		単文			ゆっくりはつきりと話された単文であれば、内容を理解することができる。
4	小6	中2	聞き手に 配慮	3文		おおよその内容	速度やポーズなど、聞き手に配慮して話された3文程度の対話や英文であれば、おおよその内容を理解することができる。
5	中1	中3	はつきり	5文		↓	はつきりと発音された5文程度の対話や英文であれば、おおよその内容を理解することができる。(高次入試)
6	中2	高1	↓				はつきりと発音された10文程度の対話や英文であれば、おおよその内容を理解することができる。
7	中3	高2	自然なスピード (WPM180)	10文		要点把握	自然なスピードで話される10文程度の対話や英文を聞き、要点を把握し内容を理解することができる。
8	高1	高3	↓	まとまった量		↓	自然なスピードで話されるある程度の長さの対話や英文を聞き、要点を把握しながら話し手の意図や主張を理解できる。
9	高2	高3		↓		意図・主張	自然なスピードで話されるある程度の長さの対話や英文を聞き、要点を把握しながら話し手の意図や主張を理解できる。
10	高3	高3		長い		↓	自然なスピードで話されるなじみがあまりない内容のまとまった文章や対話文であっても、要点を把握しながら話し手の意図や主張を理解できる。

R	上	下	クリティカル リーディング	読み取り	wpm	言語		Car-Do
						話数	lexile	
1	小5	小5	/	概要	-	-	-	簡単な短文章や対話文を読み、必要な情報を取り取り、概要や要点を正しく捉えることができる。
2	小5	小6	/	↓	-	-	-	平易なまとまりのある文章や対話文を読み、必要な情報を取り取り、概要や要点を正しく捉えることができる。
3	小6	中1	/		40	100		100Lの英文を40WPM程度の速度で読み、必要な情報を取り取り、概要や要点を正しく捉えることができる。
4	小6	中2	/		50	250		250Lの英文を50WPM程度の速度で読み、必要な情報を取り取り、概要や要点を正しく捉えることができる。
5	中1	中3	/		60	400		400Lの英文を60WPM程度の速度で読み、必要な情報を取り取り、概要や要点を正しく捉えることができる。
6	中2	高1	/		70	500		500Lの英文を70WPM程度の速度で読み、必要な情報を取り取り、概要や要点を正しく捉えることができる。
7	中3	高2	意図を正しく 捉える	詳細	80	600		600Lの英文を80WPM程度の速度で読み、文章の詳細を理解し、筆者の意図を正しく捉えることができる。
8	高1	高3	主観/客観 意見/事実	↓	100	700		700Lの英文を100WPM程度の速度で読み、文章の詳細を理解し、読み取った内容について主観と客観、意見と事実を明確に区別することができる。
9	高2	高3	論理関係		120	900		900Lの英文を120WPM程度の速度で読み、文章の詳細を理解し、読み取った情報の論理的な関係を理解することができる。
10	高3	高3	批判的読解		150	1100		1100Lの英文を150WPM程度の速度で読み、文章の詳細を理解し、読み取った内容について批判的読解ができる。

↓：徐々に段階が進む

※Lexile 指数: Lexile 指数は、英語の読解力を客観的に測定するツールとして開発された指標で、英文に使用されている単語数や難易度、構文の複雑さなどを総合的に数値化したもの。本の場合はその難易度を、人であれば「読む力」を示す。指数は「0L」から10刻みに上がり、難解な専門書は「2000L」を超える。アメリカでは教育現場で幅広く活用されている他、世界165か国で使用されている。

【資料3 振り返りシート (Lesson 6)】

YOURSELF

項目	評価規準	○ / ×
構成	Intro – Body – Conclusion の形式になっている。[W-6 ~ 7]	
	Body が TS-SS1-SS 2 の形式になっている。[W-7 ~ 8]	
目線	メモばかり見ず，聞き手の顔を見て話すことができた。	
発声	大きな声ではっきりと話すことができた。	
VA	ビジュアルエイドを効果的に使うことができた。[S(P)-6]	
メモ	key word だけでがんばれた。	
表現	聞き手に伝わるような表現を心がけた。	
魅力	聞き手に魅力が伝わるよう工夫した。	

振り返り

- 1 自分でうまくできたと感じた点は？

- 2 自分でうまくできなかつたと感じた点は？

- 3 次回がんばりたいことは？

- 4 本当は英語でこんなことを言いたかったのに！ということを書きましょう。

Class

No

Name

9 参考文献

- 『旧課程と現課程の中高英語教科書の難易度比較 —中高6年間の教科書難易度の推移—』
大田悦子 (2017)